２０２０年度　群馬大学共同教育学部
推薦入試・帰国生入試問題

社会専攻

小論文

注意事項

1．試験開始の合図があるまで，この問題用紙を開いてはいけません。
2．問題用紙は表紙を含め３枚，解答用紙は１枚，下書用紙は１枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3．受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4．解答は指定の解答用紙に記入してください。
5．解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6．問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで，以下の問に答えなさい。

2011 年３月 11 日，三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生しました。この地震の規模を示すマグニチュード 9.0 という数字は，日本の観測史上最大のものです。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北約 500 km，東西で約 200 km とたいへん広範囲に及んでいて，巨大地震が引き起こした大津波は東北地方から関東の太平洋沿岸部に，場所によっては壊滅的といっていいほどの大被害を与えました。

（中略）

では，今回のように三陸以南から関東の沿岸までが大きな津波による被害を受けたことはあったのでしょうか？　たしかにここ 100 年というタイムスパンではありません。ですから一般の人にとっては「未曾有（みぞう）」といってもいいのかもしれません。おそらく住んでいる人でも，自分たちが住んでいる土地にかつて津波被害があったことを知らなかった人も大勢いたことでしょう。

しかし専門家だったら話は別です。869 年の「貞観（じょうがん）地震」のときには，三陸沿岸から東北地方南部沿岸に大津波が押し寄せました。たとえば，仙台平野で海岸線から３～４km の地点まで浸水したことが，最近の調査で明らかになっています。つまり 1200 年のスパンで考えると，今回の震災は決して「いまだかつてないこと」でも「きわめて珍しいこと」でもないのです。一般の人々から見たら確かに未曾有ですが，地震や津波の専門家ならこの規模の災害が起こることは当然考えておかなければならなかったことなのです。

明治から昭和期にかけて活躍した物理学者にして名随筆家の寺田寅彦は，「『自然』は過去の習慣に忠実である。地震や津浪（つなみ）は新思想の流行などには委細かまわず，頑固に，保守的に執念深くやって来るのである。紀元前二十世紀にあったことが紀元二十世紀にも全く同じように行われるのである。科学の方則とは畢竟（ひっきょう）『自然の記憶の覚え書き』である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである」（「津浪と人間」1933 年『天災と国防』講談社学術文庫，2011 年）と指摘しています。

試しに日本を襲った過去の自然災害を一つひとつ丁寧に振り返ってみてください。間隔こそ一定ではないものの，同じようなことが同じような場所で繰り返し起こっていることに気づかされるでしょう。

<u>それをさも未曾有の出来事のように扱っているのは，単なる言い訳のようにしか聞</u>

こえません。自然災害について人間は，起こった直後こそ真剣に取り合うものの，時が経つとだんだん忘れて，最後はなかったものとして扱ってきました。今回の震災を語るときに「未曾有」という言葉が安易に使われている背景には，そのようなことがあると考える必要があります。

いま述べたように，人間は非常に忘れっぽい生き物です。もちろんそれは悪いことではありません。辛い経験を含めて過去のことをすべて覚えていたら，前に進めなくなって動きがとれなくなってしまいます。つまり，人間が忘れっぽいという性質を持っていることは，「前向きに生きるための一つの知恵」ということもできます。

しかし，失敗や災害の対策を考えるときには，この性質がマイナスに働くのです。

出典：畑村洋太郎『未曾有と想定外　東日本大震災に学ぶ』講談社現代新書，2011年（出題の都合上，一部表記・表現を改めた．）

問１　著者が東日本大震災に関して下線部のように述べている根拠をまとめなさい。（200字程度）

問２　日本列島は世界の中でも自然災害が多く発生する地域にあり，それによる被害は日本列島のさまざまな場所で頻繁に起きている。本文の内容をふまえたうえで，防災のあり方についてあなたの考えを述べなさい。（600字程度）